

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その44

文：星 眞智子

新郷の人々の暮らしに息づく観音・地蔵信仰



江戸時代には新郷地区の5集落に観音堂、5集落に地蔵堂があり、地蔵堂には観音様が一緒に祭ってあります。また、3ヶ所に占いの石や仏様（おびんずる様など）が安置されています。独自のご詠歌のある集落は9つあり、ご詠歌はなくても、各集落で観音講が行われており、信仰の深さがうかがえます。会津の観音信仰は新郷にも浸透しており、女性は伊勢参りに行けなかったので、観音講で集まり、会津三十三観音の歌詠みで心の旅をし、サロンの場としてお茶飲みや愚痴こぼしなどで娯楽を楽しんでいました。

一方では、飢饉や年貢の取り立てなど厳しい生活を強いられ、子供が産まれても半分しか育たなかった状況もあったようです。そんな暮らしの中、

近くに医者がいなかった時代、お産が軽くなるようにと近所のおばあさんが石で占ったり、病気が早く良くなるよう祈りながら仏様を持ち上げたり、良くしたい部位をなでて願を掛けたり、年貢が軽くなるよう観音様にお祈りをしていました。また、子供の夜泣きが治るようにと地蔵様の前掛けを借り、治った暁には借りたものともう1枚新しく作ったものを奉納しました。橋立の地蔵堂には天井からお米一合の入った袋を掲げる場所があり、母乳の出ない人はそのお米を頂いて帰り、母乳が出るようになったら二合持ってきて倍返ししたといひます。観音様や地蔵様は、老若男女にとって心の拠りどころであり、拝見すると先人たちの生きた証しがひしひしと伝わってきます。

本町でも縄文時代の土偶が出土していますが、土偶は安産、食料確保、病気治癒など人々の願いを掛ける道具、心の安定を祈る道具とも考えられているようです。この土偶が時代を経て形を変え、観音様や地蔵様への祈りとして受け継がれてきたのでしょう。
(参考文献『新郷村誌』)



樟山の地蔵堂

今月の表紙

今月は、11月10日に会津若松市で行われた「ラッピングバス出発式」より。

バスには、西会津町の風景や人、食べ物、特産品、縄文土器などの組み写真と「日本の田舎、西会津町。」のロゴがデザインされ、目を引く車両になっています。
(14ページに関連記事)

編集後記

にしあいづまちなか市で久々に町内を歩きました。最近、私が取材に出る時は天気が悪く、今回も朝はあいにくの雨模様でした。しかし、昼頃から日差しが出て、少し暑さを感じながら会場周辺を何周か回ることができました。「10キロくらい歩いたので、は…」と思っていました。距離を測ってみましたら約6キロ。意外と歩いていませんでした(笑)。日頃の運動不足を解消するため、これを機にもっと歩きたいと思えます。(秦)